茅葺きの材料

以前白川郷の大部分で合掌造り家屋の茅葺き材として使用されていたのは、カリヤスというイネ科ススキ属の草でした。カリヤスは庄川峡の丘陵地帯で栽培されていました。大抵は高地に位置するため日射量が豊富で土壌もカリヤスの栽培に適しています。各家庭専用の畑があり、夏の間にカリヤスを育てて雪が降る季節が来る前の 10 月下旬から 11 月末までの間に刈り取っていました。初雪が降る前に刈り取りを完了する必要があり、多くの人手が必要でした。というのも慣れた人なら 1 日で 60～100 束を刈り取るのも可能でしたが、通常の屋根を茅葺きするにはおよそ 1 万束ほどが必要だったからです。刈り取ったカリヤスはまず乾燥させてから、ニュウと呼ばれる巨大な円柱状に積み上げて丘陵地帯で保管していました。茅葺屋根を葺き替える必要が出ると、ニュウを解体して使っていました。乾いたカリヤスの束を結ぶと、山腹から押して下に転がすか、地面に雪が残っている間は村人が巨大なそりのように「運転して」谷底まで滑らせて移動していました。

現在では、茅葺きに使うカリヤスは車で行ける範囲にある畑でしか栽培されておらず、集落の中で乾燥しています。乾燥済みの草は小屋に入れて保管されています。カリヤスという草自体が入手困難となり、ススキという成長が速く入手しやすい品種に取って代わられました。1970 年代以降の人口減少により、昔ながらの草地の維持は困難となり、現在白川郷で使用されているススキの多くは静岡県の富士山付近で栽培されています。カリヤスは茎の中が空洞ですが、その代わりに茎の内部が濃い綿毛で覆われているススキが使われるようになったため、茅葺屋根に雨や雪が降ってから乾燥するまでの時間が長くなってしまいました。ですからススキを使用した茅葺屋根の劣化は比較的早くなり、20～30 年ごとに葺き替えなければなりません。それに対しカリヤスを使った茅葺屋根ならこれより数十年も長持ちすることがあります。